
雨宿り

呉武鈴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宿り

【Nコード】

N2576M

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

たまたま雨宿りのために駄菓子屋に寄った私は店番の青年と話した。

（前書き）

某サークルに投稿した作品です。よければ感想をください。

下校中に急に降り始めた雨。ただひたすらに私と世界を湿らしていき、私を嘲笑うかのように音をたてる。今朝の天気予報で降水確率30%だから油断して傘を持ってこなかった自分が悪いが『だからなんだ』って感じた。文句は誰一人として言えるわけじゃないし。そう考えながら私は近くにあった駄菓子屋に避難していた。

「いらつしゃい、ゆつくりしていつてね」

店の奥から眼鏡をかけた見た目20歳後半の青年が出てきて、人の良さそうな顔で言う。

「あ、はい」

さすがに『雨宿りに寄っただけだから何も買うつもりはありません』なんて言うのは失礼だろうから適当に返事をして雑多に並んでいる駄菓子を見る。

「ちよつと僕と話してくれないかい？」

突然の頼みに私は訝しげに青年を見る。

「最近、あんまりお客さんが来なくて暇でね、たまに来た人を誘っているんだけど…」

そう言いながら売り物であろう煎餅を木の皿に並べて、湯呑みを二つと急須を用意していた。

「…それ、売り物ですよね？」

私は煎餅を指差しながら言う。青年は「うん、でも損するのは僕だけだから」と言う。と煎餅を食べる。

…変わった人だな。

「…美味しい」

雨で濡れた身体を温めるように青年の淹れてくれた玄米茶は私の身体を満たしてくれた。

「それは良かった」

嬉しそうに言う青年も煎餅を食べながらお茶をすする。その姿があまりにも似合っていて、一瞬見惚れてしまったが青年がこっちを見たのですぐに視線を逸らす。

「…雨凄いですね」

私は恥ずかしさを隠すために更に強くなった雨足を見て、適当に話題を作る。

「君は雨が嫌いかい？」

青年は軒先の風景を見ながら私に聞いてくる。

「…濡れるから嫌いです」

少し考えて言葉を出す。青年は「そうだね」と私に同意する。

「僕も濡れるから嫌いだね。でも好きでもある」

嫌いだけど好き？よく分からない。

「だってこうやって雨宿りに来てくれる人がいるからね」

笑いながら言う青年に何故か更に恥ずかしくなった私は「時間なので帰ります」と適当なことを言って立ち上がる。

「ちよつと待って」と青年は私を呼び止め、店の奥に戻っていく。しばらくして

戻ってきた青年の手には傘が握られており、それを私に差し出した。

「返さなくてもいいよ」

「え、でも…」

「いいよ、損するのは僕だから」

青年の笑みに逆らえず、私は傘を受け取る。

「…また雨が降った時に返しに來ます」

私はそれだけ言つと逃げるように駄菓子屋を後にした。

（後書き）

すべての作品はここに投稿する前に必ず、知り合いに読んでもらっているのですが「この作風のほうが好い」、「ほのぼの路線に変更したほうがいい」と全員に言われました。
…なんか悲しいです（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2576m/>

雨宿り

2010年10月15日22時43分発行